
とある街角でまた...

慈眼 雪崩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある街角でまた…

【Nコード】

N4965A

【作者名】

慈眼 雪崩

【あらすじ】

大量廃棄されてしまった『サイボーグ機械人形』何とか廃棄されなかった『空知』通称『クー』の不思議な奴とある依頼…

(1) 依頼！？

白い空間の仲に俺はいた。

何処まで行っても終わりがなかった。

不意に、何者かの気配がした。

『お前は…ただの…人形だ。』

何者かがしゃべっている。

「俺は誰にも操られていない。感情もある。」

ついムキになって否定し思わず殴りかかる。

『さあソレはどうかな？』

その言葉を聞いたと思うと、周りの風景が変わっていった

「…夢か？」

ゆっくりと体を起こして見る。

周りには木しかない。

「何だ、今のは？」

そつ口に出してみるが、考えれば考えるほど混乱する。

「落ち着け、俺」

そういて、ゆっくり深呼吸する。

「はあ…。よし。え〜と、俺の名前は空知^{そらち}。

面倒くさいからクーって決めてるけど、もちろん偽名だな。
本当の名前なんか忘れたし。何10年も前のことだしな。」

自問自答である。

周りから見れば何とも奇妙な光景である。

「んで…あ、やべ。急いでこの依頼をコンプしないと…！」

そう言うや否や、自分の踝^{くるぶし}の部分を押す。

するとかかとかから圧縮された空気が一気に噴出して…浮いた。

「じゃあ、時速120kmぐらいでつてところかな？」

体を前に倒し、猛スピードで空を飛び移動する。

そう、何を隠そう彼は機械人形^{サイボーグ}なのだ。

しかも、感情を持つと言われている。

痛みも感じれば涙も流す。

全世紀まで大量生産されていたが、今世紀で大量廃棄された。

おそらく感情が付いていることが邪魔になったのであろう、

ほとんどの人々が旧型のロボットを使用するようになった。

それでも何機かは逝きに残っている機械人形もあった。

そのものたちはたいいてい機械人形と言う事実を隠して生きていた。

見つければ廃棄処分なので当然である。

そのぶん、機械人形であることを隠してない彼はまれである。

……20分後……

「はあやつと目的地までついた。」

どうやらやつと目的地の街『リヴェル』についたようだ。

「…んで、確かこの辺の…」

入り組んだ路地を抜けてやつと広い場所に出た。

そこにはものすごい高さの『豪邸』が建っていた。

「うわあ、すげっ…」

初めて見る光景に思わずクーンも声を上げる。

「確かこの家だよな…」

もう一度メモの紙を見てもはつきりとこの場所が記されていた。

「はあ…」

門にボディーガードらしき人がいるのを見て、ため息をついて門に向かう。

「なんだ貴様は!？」

ボディーガードらしき人が声をかけてきた。

ああ、嫌だな、こんなやつと話すの…

などと心の中で思いながら質問に答える。

「あ、俺はお宅に住んでいるお嬢さんからこの日本刀を取ってくる

ように依頼を頼まれ…」

言葉の途中だったにもかかわらず、みぞおちに思いっきり蹴りを食らった。

「そんな依頼はしてない。帰れ。」

いきなりの出来事の頭が困惑した。

「え、え？ いや、何ならお宅のお嬢さんに連絡を取ってみたい下さい。」

「

「五月蠅い（うるさい）。早く帰らないと…」

そう言って右足の銃に手をかける。

「ああ、分かった。分かった。すぐ帰ります。失礼しました。」

そう言っつとすぐに、クーは回れ右をして走っていった。

「…おかしい…」

家の門が見えなくなるぐらいまでの位置に来、冷静に考える。

俺は確かにあそこのお嬢さんから依頼を受けた…
そう考えた後鼻で「フツ」とだけ笑う。

「タメされてるって訳か…上等じゃねーか。」

そう呟くと今度はさっきの家のウラへ回り込む。

「さて…と。」

眼のタイプを切り替える。

通常モードから体温などを感じ取れるサーチモードに切り替える。

「女の子…女の子…。」

1階から依頼主と思われる女の子を捜す。

「お、いたいた。」

3階の1番左端の部屋に依頼主の背格好と一致する女の子を見つける。

ソレと同時に、また眼のタイプを通常モードに戻し、
圧縮空気をかかとかから吹き出す。

「んじゃあ。よい…」

周りに人がいないことを確認して、軽く膝を落とす。

「ドン！！」

その声と同時に一気に3階まで上がる。

(2) 妖刀『鬼食らい』

「くっそ。暗いな。」

ぶつぶつ言いながらサーモグラフィ機能をonにする。するとソコには無数の体温があった。

「あれ？」

いきなり周囲が明るくなり、ドアから人が入ってくる。ソレと同時にクーの体が縄のようなモノで固定される。

「ようこそ。私の家へ。」

人々の中に紛れ込んでしまっている女の子が口を開く。

「ああ、どうも…。って、おい！！コレはまずせよ。
ソレが客に対するもてなしかコラア！！」

カチャという音が聞こえたと思いソッチの方を向いてみると銃が向けられていた。

しかも一人だけとかでなく、ほとんど全員。

さらに、その中にはマグナムとかリボルバーだけでなく、ショットガン、マシンガン、グレネードランチャー、機械相手にも良いようにスタンガンまである。

「コレは、コレは…。」

思わず絶句してしまう。

そんなに怒り狂うんだったらこんなことをするなよな。
心の中でそう思うが顔では笑みを作っている。

「では、依頼のモノを…。」

そう言っただ部下と思われる黒スーツの男の一人が日本刀をクーの荷物から取り、女の子に渡す。

「間違いなく、妖刀『鬼食らい』ですね。以来完了です。
ソレでは力量も見れたことですので、本題に移ります。」

「おい、何だ力量をはかったってのか？」

急に場の空気が重くなる。

クーを縛り付けていた縄が異様な音を立ててちぎれていく。
その光景にとっさに反応した部下たちが、銃を乱射する。

…が、その結果も虚しく、全てはじかれてしまう。

クソツという声とともに、グレネードランチャーが放たれる音が聞こえる。

がソレもクーの目の前で爆発する。

「この程度じゃ俺は倒せねえぜ…。」

静かに呟き、女の子の方を見る。

「…さすがですね。では改めて本題に参らして頂きます。

それはそうと、申し遅れました。私の名前は『ロビ』って言います。」

目の前ですさまじい状況に陥っているにもかかわらず、

ロビは微笑んでクーに話しかける。

「どうやら役者もそろったみたいなので、説明に参ります。」

ふとクーの横を見ると、青年らしき人間が立っていた。

「ああ、申し遅れました。そちらの方は『ギア』さんです。
とてもお強いと聞いておりますけど…」

「否定は…しない。」

ギアがそう呟いたのを聞いてロビは説明を続ける。

「今回の依頼は…コレです。」

そう言つて机の上に1枚の紙を置く。

…つかこの部屋に机があったことすら怪しい。

たとえあつたとしてもさっきの木っ端みじんになっているような
気が…。

そんなことを考えている間に、次の話に移る。

クーも慌ててその紙を見る。

「皆さんもご存じの通り。この依頼は指名手配ポスターにもありません。
す。

まあ私が出した依頼なので当然と言えば当然なんですけどね。」

ふふつと軽く笑つて話を続ける。

「それで、こいつ等を壊滅させればいいのか…？」

少しいらしたようにギアが聞く。

「そうです。期限は3日以内。報酬は…」

そういつてさっきの紙を裏返して数字を書いていく。
ソコには見たことのない程のゼロの数が並んでいた。

「ですけど、まずはこの家から脱出することが第1の条件ですね。」

そう言つて右手を挙げると、いきなりロビ・その他部下が消えて煙が出る。

窓には核シェルターのようなモノで覆われる

(3) AR - 18・セミオート

「これは…、どうすっかなあ…。」

そう呟いてみるが返事はない。

ふとギアの方を見てみると、口をしっかりと閉じている。

「これは毒煙だが…。大丈夫なのか？ギア」

そう尋ねると、ギアの口が動いたのが見えた。

推測だが、“大丈夫だ”という風に読めた。

“突破するぞ”そう口が動いた気がした。

そのとたん、ギアがいきなりこっちに向かって来る。

「え…、ってあ？」

混乱するクーにお構いなしである。

何をするかと思つたときにはギアの足が肩に乗っていた。
方に衝撃が走つた。

そう思つた瞬間、上で鈍い音が聞こえた。

そして太陽の光がクーを照らした。

「強引なやつだな…。」

人間だからしょうがないというのは置いとき、クーもそれに続き屋根へと上がる。

「さて…どうする？」

「決まっている。こいつの撃破。それだけだ。」

そう言っ指名手配の紙を指さしそのままダッシュで走り出す。
慌ててそれにクーも続く。

踝のあたりの部分を押し、かかとから圧縮された空気を一気に噴出する。

「待てって。」

そう言い、ギアの肩をつかむ。

「…サイボーグか？」

突然の出来事にギアが尋ねる。

だがその顔には返答を求めているようには見えなかった。

「って今更！？さっき思いっきり毒煙吸ってたし…。」

そんなクーの突っ込みには無視をして、腕をふりほどきクーの背中に乗る。

「早く行け、ここから目的地の『ガガサゴ』まで数10kmある」

はあ、と言っため息を漏らしクーはスピードを上げる。

「振り落とされんなよー!!」

それだけ言って、後はバランスを取るのにだけ集中した。

「ここが目的地か？」

『ガガサゴ』に数時間でついたものの、ソコにはもう街というモノではなかった。

「荒れ果てすぎだろ。なあ、どういふこと？ ギア」

そう言つてギアにふつたものの、俺に聞くなどでも言つように歩き出す。

するといきなり銃音がした。

発射されて0.2秒で反応する。

その弾丸の先はギアに向かっていることを確認すると、そのことにギアも察知し、紙一重でよける。

「久しぶりに骨のある客が来たようだな…。」

どこからか不適な笑いと共に声が聞こえた。

が、その声の最後の方まで聞き取る前にもう一度銃音がした。足下の砂が舞い上がる。

ゆっくりと砂が落ちてきて辺りを見回すと…。

「…囲まれているな。」

ギアの問いに返答はせず、クーはゆっくりと構える。

指先を銃に変換させて、いつでも弾丸が発射できるようにする。そして念のためにと、右太股にナイフを用意する。

一方ギアの方は、特に何もせず、ゆっくりクーの方へ近づく。

「分散しろ…。」

ソレを聞き振り向くと、飛びゆくギアの後ろ姿だけ見えた。

ついでに飛びざまに2・3人ほど倒していくのも見えた。

一人残されたクーだが、特に気にすることもなく、
周りの敵に立ち向かう。

指銃で5人ほど倒したところで、相手の出方が変わる。

あいても銃がきかないと分かったようで、今度はナイフを取り出す。
間合いはある。とおもって油断していたら、

ナイフを投げてきた。

慌ててソレをよけるが微妙にかすっていたらしく、指の1本が切れる。

「青銅製ナイフ…。今時あるんだね〜こういうの。」

全く、最近のモノは…などと言いつつ手のひらを上に上げる。

そう言い指銃を撃つが敵の目の前ではじけ飛ぶ。

「何だよ？今のは？」

思わず口にするがもちろん返答はない。

ふと敵の後ろの方を見ると、遠くで敵が何かしているのが見えた。
すぐに眼を望遠モードに切り替える。

ソコには口を動かしている黒い衣装を着た人がいた。

「魔法使い…か。」

そう呟いた後、圧縮空気を出し空から魔法使いへと向かう。

「んじゃあ、いつまでも雑魚の相手ばっかしてられないから。」

じゃあな、馬鹿共よ。っと言って右手を挙げて手を振る。

敵を見下すように言ったその言葉はしっかりと届いていたようだ。その言葉に過剰反応したかのように『そいつ等』も空に浮く。

「何だよ、おい。」

訳の分からない状況に思わずスピードを上げる。

「まあ、種は分かってんだけどね…。」

そう言った後はひたすら魔法使いだけを見る。

こんなこともあると、左足太股から銃を取り出す。

何処にソレがあったのかは謎である。

取り出したのはアーマールライトM-18。

「目には目を…とは違うけど、魔法には魔法ってね。」

体の電気を銃へと送る。

多少プラズマ現象が起こり銃が悲鳴を上げる。

元々普通の銃なのだから当然と言えば当然の現象。

「…ッ…オラア!!」

ためていた電気を一気に噴出することで、電気の塊をとばす。

波状ではなく、塊としてとばすことで速さと威力を上げる。

一気にバリアを破壊する。

「貴様…。」

そんなことをいつてる間に指弾をとばす。

ついでに後ろから追っていた奴らは地面へとたたきつけられたシヨ

ツクで気絶していた。

「まあ、所詮こんなもんでしょ。」

さーてつと言ったものの特にすることがない。

「ギアを追つか…。」

風が砂を巻き上げ、荒れた建物に吹き付ける…。

(4)とある街角で…

傷が深い、そう思ったときには、遅かった。
休む間もなく敵の攻撃が降りかかる。

「くっ!!」

思わず苦しみの声を上げる。

武器×素手じゃどうにもならないか…。

思わずそう考えてしまつて、思考を一時停止させる。
くそ、雑念が多すぎる…。

「集中…」

それだけを確認するように言う。

ギアは新たな敵と対峙していた。

そう、本当に新しいタイプの敵に。

人間でもなく、機械でもなく、合成獣^{キメラ}でもない。

獣＋人間であつて、機械＋人間であるモノ。

正体はいつさい分らない。

分かるのは見た目が人間というのと、

「桁外れに強いな…」

思わずそう呟く。

「…」

話さない。

対峙している『ソレ』は一度も話してない。

と、無言のままソレは自分の右手を今度は剣に変化させる。

足は動物の――おそらくチーター系統であろう――足に変化させる。

地面を軽く蹴るだけでギアとの間合いが詰められた。

この間合いはヤバイ。

思ったときにはすでに時遅し。

突きで攻撃してきた相手の剣先が左手を貫通する。

「…この野郎！！！」

叫ぶやいなや剣を右手で掴み投げ飛ばし頭から地面に落とす。

地面についた瞬間にその頭を右足で思いつき蹴る。

軽く10mは吹き飛び、また距離を取る。

数秒のち起きあがったソレは、頭が変形していた。

しかしソレをすぐに元の形に戻す。

……元の人の顔に……。

人間だったら死んでいる。

機械だったら変形は戻せない。

つまり、信じたくはないが、コレは……。

「妖か……」

対魔の武器でしか倒せないというソレ。

「つまり、裏を返せば、“対魔の武器であれば倒せる”」

取り出したるは太古の剣。

そしてクーが取ってきた剣でもあった。

…妖刀『鬼食らい』

レア度9。

対魔専用の武器、日本刀に似せて作られている。

鬼を食う、つまり妖の血を吸収する。

そして吸収した分だけ“重くなる”が攻撃力も高くなる。

…諸刃の剣。

鼻で軽く笑い飛ばし、静かに構える。

敵は鋼鉄にも変化できる。

つまりこれだけでは斬ることが出来ないため、倒せない。

「鋼鉄に変化させる前に…斬る。」

一気に地面を蹴る。

ソレも地面を蹴る。

一気に間合いが詰まる。

ソレが右手を袈裟斬りに斬りつける。

すぐに鬼食らいで横に払う。

そのまま一回転するようにして、横に斬りつける。

だがすぐに脇腹の部分を鋼鉄に変えて刃を受け止める。

そしてソレは払われた右手を今度は無数のトゲのついたドリル状のモノに変える。

その右手を一気に突く。

すぐに鬼食らいで受け止めようとするが、ソレの左手で掴まれる。

いったん鬼食らいを傷ついている左手をつけ添え、

両手でもって両足で一気に腹を蹴る。

その衝撃に双方吹き飛ばされる。

が、ギアはすぐに鬼食らいを地面に突き刺し勢いを殺し、着地する。その瞬間鬼食らいを思いつきり投げる。

腹に向かって飛んだその剣に合わせるようにして腹を鋼鉄化する。

その瞬間、どこからか銃音がしてソレに当たる。

10発ほどの銃弾がソレの頭一点に当たり空中で宙返りするようになる。

投げられた鬼食らいに背を向ける形になる。
そして鬼くらいが刺さる。

腹は鋼鉄のままのため貫通はしないが、
刺さった鬼くらいがソレの体内を吸収する。

「ふう、やっと終わりか。クーだろ。」

ギアが一息つけて口を開く。

「何だ、ばれてしまったのか、残念。」

さっきの銃弾を飛ばしたのはクーだった。

ギアを探していたら金属がぶつかる音がしたからそこに行くところ…

「ギアがいたって訳さ。」

それにしてもさっき初めて名前呼ばれたな。」

「五月蠅い（うるさい）な。さっさと報酬もらいに行くぞ。」

うざそうにするギアを見てクーは軽く鼻で笑う。

何がおかしいというような顔をしているギアを見て、歩き始める。

「にしても、依頼相手のボスが妖だったとはな…。」

そう、今までになかった妖という敵。

これの生態などはいっさい不明なのは間違いないだろう。
だが、またこんな敵が出たら…。

ギアはそこで一旦思考を止める。

ふとクーを見るといつの間にか上空にいた。

その辺で拾った食料を食べ（その食料が体内の何処に行くのかは不

明だが）、
鳥と戯れ、笑いながら飛んでいる。

「まあそのときはまたこういう奴らがどうにかするか…。」

ギアもいつの間にか笑っていた。

もう夕暮れ、太陽も眠そうにしてる中、3日の依頼を1日で終える。

「乗ってく？」

いつの間にか目の前にいるクーが顔をのぞき込んで言う。

「ああ、そうするか。」

ぶっきらぼうに答え、乱暴にクーの背中に乗る。

「おいおい、俺はレアなんだからもうちよつと丁寧にな…」

な、と付け加え、スピードを上げる。

時は朝、依頼主のところに行く報酬をもらってすぐに終わった。

「本当に良いのか？クー。」

ギアが不思議そうに尋ねる。

「良いつて、別に。お前こそ家族いなくて困ってんだろ？俺はレアだからな。捕まらなければソレで良いから。」

思わずギアはすまないと言ってその報酬金をもらっ。

「あゝあ、もうお前みたいな不思議さんとは会わないかもな。」

「俺は別にもうお前みたいな奴とは会わなくても良いが…。」

少し残念そうに言ったクーに対して否定的にギアが答える。

「でも、またどこかで会うかもしれないな。ギア」

「ああ、そうだな。いつの間にか会うかもな、こういう仕事をして
いる間は。」

「どっかの街角で会うかもな。んじゃ、そのときにまた。」

クーが軽く笑って手を振る。

それに便乗するようにギアもつられて手を振り、思わず笑う。
朝日が昇ってきた。

クーはもう次の用事があるからと、急ぎ足で去っていった。
クーの背中が見えなくなっただぐらいでギアがぼつりと話す。

「…とある街角で、また、な…。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4965a/>

とある街角でまた...

2010年10月20日18時29分発行